

1945年3月におけるファム・クインの首相辞任

Phạm Quỳnh's removal as prime minister in March 1945

宮 沢 千 尋

Chihiro MIYAZAWA

Abstract

Phạm Quỳnh was a famous pro-French intellectual and a chief writer of the *Journal of Southern Wind* (*Nam Phong Tạp Chí*), where he advocated for the establishment of *Quốc Học* (*National Essence or National Study*) by the implementation *quốc ngữ* writing system. By doing so, he made a contribution to Vietnamese cultural affairs.

In 1933, he became prime minister in the court of the Emperor Bảo Đại and until 1941, he monopolized administrative power with the French Résident Supérieur.

In this article, I examine his political activities and thoughts in March 1945, when Japanese troops overthrew the French colonial government and gave partial independence to Việt Nam, by utilizing the memories of Quỳnh himself, the Emperor Bảo Đại, Japanese Special Ambassador Yokoyama Masayuki, and Phạm Khắc Hòe, Chief Palace Secretary of the Emperor. After the coup by the Japanese army, Quỳnh negotiated with Yokoyama and shared administrative authority with him. Quỳnh agreed to Japanese policy and tried to collaborate with Yokoyama for Vietnam's complete independence. He told Yokoyama that he was a patriot. However, to establish a new government, on March 19 the Emperor Bảo Đại removed Phạm Quỳnh as prime minister because Bảo Đại decided to run the government by himself and listened to opinions against Quỳnh from anti-French nationalists, such as Huỳnh Thúc Kháng, Tôn Quang Phiệt, and Ngô Đình Khôi via Yokoyama and Phạm Khắc Hòe.

After the surrender of Japan on 15 August, when the Vietnam Independence League (Việt Nam Độc Lập Đồng Minh Hội, its abbreviation was Việt Minh) launched the August Revolution, Quỳnh was arrested and executed by local Việt Minh cadres.

はじめに

本稿は、フランス植民地時代の著名なジャーナリスト、翻訳家、『南風雑誌』(*Nam Phong Tạp Chí*)の主筆であり、「仏越提携」を唱えた代表的な「親仏派知識人」で、1932年からは皇帝バオダイ(Bảo Đại)の下で官房長官、学部尚書(文部大臣に相当)、吏部尚書(首相に相当)を務めたファ

ム・クインが、1945年3月9日に日本軍が起こしたフランス植民地機構の解体とベトナムへの「独立」付与（いわゆる「仏印処理」、軍事作戦名は「明号作戦」）に際して、内閣の筆頭たる吏部尚書としてどのように日本側と交渉し、なぜ「独立」ベトナムの政体が固まった時点で辞任に追い込まれたのか、時局に対する彼の態度がどのようなものかを明らかにすることを目的とする。

ファム・クインは1892年にハノイに生まれた。父は科挙試験に合格した儒教知識人だったがというが早世しており、おそらくそれが理由で、クインは当時の知識人としてはまだ珍しかったフランス植民地機構が設立した通訳学校に学ぶことを選んだ。16才で学位を得て、フランス極東学院(École Française d'Extrême-Orient)に勤務した。科挙受験の経験は無く、そのために王都フエの国学中学などの儒教の学校に通ったことも無い。漢字や儒教の知識は極東学院時代に「自学自習」したと評されるのはこのためである。

フランス植民地機構の警察部門の責任者であるルイ・マルティエー (Marty, Louis) が、やはり親仏派知識人として知られたグエン・ヴァン・ヴィン (Nguyễn Văn Vĩnh) にプロパガンダを目的として1913年に創刊させた『インドシナ雑誌』の執筆者となった後、同様にマルティエーの指示のもとで1917年に創刊された『南風雑誌』の主筆を1932年まで務め、数多くの論説、翻訳を著した。総ページ数は1万ページを超えるという [Pham Thế Ngũ 1965: 133-134]。

1932年からはフランス植民地政庁の最高責任者であるインドシナ総督パスキエ (Pasquier) が企図した宮廷中心の行政改革により、バオダイに請われて宮廷に入り、学部尚書兼官房長官を経て、1933年からは吏部尚書、1945年の「仏印処理」に際しては日本の特使横山正幸と交渉し、また特別顧問となった横山とともに行政事務の責任を担うが、3月17日のバオダイによる独立宣言発布の後、吏部尚書を辞任した。1945年8月15日の日本の連合国に対する無条件降伏の後に起こった「八月革命」により、ホー・チ・ミン (Hồ Chí Minh) を指導者とする「ベトナム独立同盟会 (Việt Nam Độc Lập Đồng Minh Hội)」（ベトミン Việt Minh）の地方勢力により逮捕され、処刑された。

筆者は、「仏越提携」を唱え、植民地支配制度の枠内で言論活動を行ったファム・クインの思想を「言語・文化ナショナリズム」の観点から研究する論文の執筆 [宮沢 2012, 2020] や講演を行ってきた¹⁾。クインの思想を十分に明らかにするためには、1932年以降に彼が宮廷の官僚として現実政治にどのように関わったかが重要であると考え、当該時期については、彼の著作が『南風雑誌』時代と比べて激減していること、ベトナムの現政権を保持する共産党を主力とする革命勢力により処刑されて、その存在がつい最近までタブー視されてきたことから、未解明の部分が多い²⁾。

本稿で筆者は、この課題を考察する一環として、1945年3月9日の「仏印処理」から、3月19日の辞任までの時期を取り上げることとしたい。その際、クイン自身の回想や、バオダイ帝、横山正幸、バオダイの官房長官でクインと対立する立場にあったファム・カク・ホエ (Pham Khắc Hòe) の回想録を参照する。また、その際に、個別に書かれたこれらの回想記を比較・検討することにより、この時期に何が起きたかを時系列的に整理し、その際、各人の意図はどのようなものであったかを明らかにする。まず、次節ではファム・クインの言論活動や彼の思想の特徴を簡単に述べておきたい。

1) 「植民地期ベトナムの言語・文化ナショナリズム——ファム・クインと『南風雑誌』を中心に」国際日本文化研究センター共同研究会「東アジアにおける哲学の生成と展開——問文化の視点から」第三回共同研究会、2020年8月29日、於京都大学（オンライン参加）。

2) ただし後述するように現政権下においても、ファム・クインの再評価と復権は急速に進んでいる。

I. ファム・クインの言論活動と思想

1. 『南風雑誌』

本節では、ファム・クインの執筆・翻訳活動と、彼の思想を簡潔に紹介する。前述の通り、『南風雑誌』は1917年に創刊された。その目的を創刊号の「巻頭言」においてクインは以下のように述べている。

- ①新しい学を確立して古い儒学に代え、同時に時勢と我が民の水準に合致する新たな思潮を提唱する。西洋の思潮、特に大フランス国の思潮を祖述するが、国粹を忘れない。
- ②基礎的な知識の普及ではなく、我が国の高等学会の機関誌となり、「旧学」層と「新学」層を融和させて一つにする。
- ③古い学術思想とともに、現代世界の重要な問題を扱う。我が国の人々の水準に合わせて簡潔に論ずる [Phạm Quỳnh 1917]。

また、クインは記事内容について、「巻頭言」で以下のように規定している。

- ①社説：時局と我が国に関する問題を論じ、人々に理解させる。
- ②文学評論：史学を含む古今東西（特にフランス）の作品の翻訳・解説・紹介。
- ③哲学評論：東西の思想を比較し、我が国独自の思想を提唱する。「唯心主義」・「利他主義」を重視する。フランス哲学を我が国の哲学のモデルとする。
- ④科学評論：個別領域ごとではなく、「格致」を教える一つのクラスのように論じる。
- ⑤文芸欄：新興文士のために韻文・散文・辞賦・歌曲を掲載する。ノム³⁾によるクオックグーの文章の道を開き、我が国の学を発達させる。
- ⑥雑報：新刊、名言の紹介。学会消息。
- ⑦時事評論：国内外の時事、植民地政府の政策の紹介。第1次世界大戦の月ごとの情勢。
- ⑧小説：フランス語の翻訳。
- ⑨語彙集：将来の辞典編纂のためのクオックグー、フランス語、漢字語彙集の作成 [Phạm Quỳnh 1917]。

知識層に向けたベトナムの文化・文芸についての総合雑誌を目指したものと言える。ただし、17年間の長きに亘って刊行されていたため、時期によって記事内容の重点は変化した。ファム・テーグーによれば以下の通りである [Phạm Thế Ngũ 1965: 131-133]。

- ①第1期：1917-1922年。創刊から拡大の時期。記事の内容は翻訳、抄訳、植民地政府の政策や皇帝への賛同が中心で、漢文記事が多い。
- ②第2期：1922-1925年。ファム・クインの訪仏後、雑誌の評判が海外にも達する。漢文主筆が交代し、グエン・バー・チャック (Nguyễn Bá Trác) からレ・ズー (Lê Du) になり、フランス語篇も創刊される。開智進徳会におけるクインの演説の掲載など、国民の教化・啓発

3) 漢字で表記することができないベトナム語独自の語彙を指す。

を重視するようになる。

- ③第3期：1925-1932年。1925年以降の情勢変化の影響で⁴⁾、記事内容が「政治化」する。政党論、ルソー、モンテスキュー、ヴォルテールの学説に関する記事・翻訳が掲載される。ファム・クインは立憲論を提唱し、フランスによる直接統治を主張する論者と論争する。
- ④第4期：1932-1934年。衰退期。上記の活動により、ファム・クインは請われて宮廷に入り、主筆が交代する。フランス語記事が多くなり、漢文篇は廃止される。1934年に時流に合わず停刊する。

2. ファム・クインの関わった論争

ファム・クインの言論活動と思想の特徴を、筆者は「言語・文化ナショナリズム」と名づけた。クインは一貫して植民地制度の枠内に留まって活動し、19世紀の勤王運動、20世紀初めのファン・ボイ・チャウやホー・チ・ミンらのベトナム共産党に代表される武装闘争路線とは一線を画していた。以下では、クインが「言語・文化ナショナリズム」を主張した1910年代後半から30年代にかけて『南風雑誌』を拠点として他誌紙の論者との間に交わされた論争について紹介する。

2-1. キム・ヴァン・キエウ論争

『キム・ヴァン・キエウ（金雲翹）伝』（以下『キエウ伝』）が、ベトナムの国民文学であるか否かをめぐる論争である。同書は、中国清朝初期の通俗小説を阮攸（グエン・ズー 1765-1820）が翻案し、薄幸の佳人の数奇な運命と彼女を取り巻く人物の人間模様を流麗な韻文六八体で描いたもので、内容と言語形式の美しさで原作をはるかに凌ぐ傑作となった。19世紀以降、民衆によって歌謡やことわざの類に取り入れられ、本のページを開きその内容によって吉凶を占うことが行われていた[川口1999:310]。また、フランス植民地時代には、1913年にグエン・ヴァン・ヴィンによりチュノムからクオックゲーに翻訳され、1923年の第7版は3万部印刷された。1924年にはフランス人経営の映画スタジオ Indochine Films et Cinémas により映画化されて、全国で上映された[Goscha 2004: 150]。

クインは『キエウ伝』を①国音を文章にするという偉業を成し遂げた、②ベトナムの国華、国粹、国魂であり、世界の文学作品に引けを取らない名作である、③『キエウ伝』が無かったら、ベトナムはどうなっていたかわからず、④『キエウ伝』が残ればことばが残り、ことばが残れば国は残る、と高く評価した[Phạm Quỳnh 1919]。

この④の主張がファム・クインの「言語・文化ナショナリズム」である。植民地制度の枠内で言論活動を行い、その制度そのものを武力で打倒することなど考えていなかったクイン自身の立場を象徴することばであるとも言える。

クインの主張に対し、ともに1907-1908年に民智・民権の向上を目指した私立学校である東京義塾の創始者で「開明的儒教知識人」である、ゴー・ドゥック・ケー（Ngô Đức Kế）（『ヒュータイン（Hữu

4) 1925年に、東遊運動のリーダーで中国を拠点に民族主義運動を行っていたファン・ボイ・チャウ（Phan Bội Châu）がベトナム国内に連行されて裁判にかけられた際に減刑嘆願運動が全国的に広がった。また、東京義塾の設立者であり1908年に捕らえて入獄し、後フランスを拠点に活動して帰国したファン・チュウ・チン（Phan Chu Trinh）が1926年に死去すると、追悼運動が全国的なものとなった。これらの事件を契機にベトナムの民族運動は急進化したと言われる。

Thanh)』主筆)や、フイン・トゥック・カン (Huỳnh Thúc Kháng) (『民の声 (Tiếng Dân)』主筆) は儒教道徳の観点から、『キエウ伝』の文章はすばらしいが花柳界を扱っているので正学に基づかず、何ら教訓とすることはできないと批判した。

ファム・クインの「ことばが残れば、国が残る」という主張は、1925年の「ナショナリズム」という論説においても展開されている。彼はナショナリズムを文化面、社会面、政治面、経済面に分け、最も詳細に論じているのが文化面である。彼の主張の要約は以下の通りである。

文化は、その国の骨格となる精神である。文化を作り伝播させる道具・器官になるのは、ことばである。どの国にも独自のことばがあり、その国その民の固有の精神を表象することができる。我が国にはクオックゲーがあり、我々はクオックゲーを維持し、補わねばならない。ことばは国であり、ことばがあれば国があり、ことばが失われれば国も失われ、そうなればすべてが失われる。だから我が国の文化問題とは、国文とクオックゲーという一つの問題に収れんする [Phạm Quỳnh 1925]。

2-2. 国学論争

このような主張は、1931年の「国学」に関するファン・コイ (Phan Khôi) らとの論争においても述べられている。国学論争とは、中華文明によるものでもなく、西洋文明によるものでもないベトナム独自の文化や学問は存在したか、または創出可能かに関する論争である。以下にクインの国学論を述べるが、その特徴は東西文化の融合を主張する点にあった。

まず、ベトナムの国学の現状に関しては、1931年の「国学について論ず」において「ベトナムに国学があったとしても小さく狭いもので、天下に自慢するようなものではない。科挙の鋳型の中で人材が育成され、思想や学問の自由が無かった」と手厳しく批判している [Phạm Quỳnh 1931a]。

一方、前述の1925年の論説「ナショナリズム」の中で、彼は「文化は、その国の骨格となる精神である」と述べていたが、「国学について論ず」では「国学を確立するためには、自分の骨格となる精神を維持して、他人の良い所を取って補い強くすることである」とも述べている。彼は1924年にも、「東洋の誠実を旨とする道学と、西洋の功利を追求する科学を取捨選択して調和させることが必要である」と述べていた [Phạm Quỳnh 1924] が、1931年には「科学の批判や考究の方法を用いて、東アジアの古い学説と義・理を学び、それらの真理を西洋科学の発明とともに、熟考・対照しなければならない」と、より具体的な方法を提示している [Phạm Quỳnh 1931a]。

さらに、「キエウ論争」や「ナショナリズム」以来の「ことばの問題」(クオックゲーや、それによって書き表される国文) については、やはり1931年の「国学と国文」において「ベトナムに国学が無いのは、ふさわしい国文を持っていないからだ」として、国文の整備・確立に関して以下のように述べている。

ベトナム語は詩や歌を作るには語彙も豊富で美しいが、高尚な思想を表現するには俗っぽく、大雑把で厳粛ではない。正義や公理を述べる時には漢文を使い、学術を広める文字としてきたが、漢字は長く停滞してもはや「死文」であり、中国の古学は「死学」であり、これらを学んでも独自の国学は生まれない。一方、現在は西学の時代であるが、西洋の新聞雑誌に書いてあることを語るだけでは他人の思想・学術を借りているにすぎず、ベトナムはフランス語による

国学を持つことはできない。ベトナムの国学を持つには、ベトナムの国文を持たねばならない [Pham Quỳnh 1931b]。

そして、クインは、国文を発達させるための資料として、民間のことわざやカーザオ（民間の口頭伝承詩）、漢文やベトナム語に常用される成語・古語・故事を収集して、国文を豊かにすることを主張した [Pham Quỳnh 1931b]。このようにクインは、ベトナム固有の国学を表す国文から、漢語を排除することは考えていなかった。むしろ、それらの語彙を採り入れ、クオックゲーで書き表すことによって、国文を充実させようとしたのである。

以上のようにファム・クインは言語や文化に重点を置いたナショナリズムを主張したが、一方で徐々に現実政治に参加していく。次節では、この点について簡潔に述べる。

3. ファム・クインと政治

ファム・クインが政治に本格的に参加していくのは、1925年にファン・ボイ・チャウの裁判が行われて減刑嘆願運動が、1926年にファン・チュー・チンが死去して追悼運動がそれぞれ全国的なものとなったことをきっかけとしている。1925年はベトナムの民族運動が急進化した年とされる。その後、1927年には中国国民党に倣ったベトナム国民党が、1930年にはベトナム共産党が結成され、前者は結党直後から苦力募集業者の暗殺などのテロ路線を採っていたが、30年2月に北部のイエンバイで大規模な蜂起を起こした。後者は30年5月のメーデーを機に全国で蜂起を起こし、特に中部のゲティン地方では、1年以上に亘って「ゲティン・ソヴィエト」と呼ばれる村落自治政権を樹立した。

このような状況下で、前述の通り、『南風雑誌』の記事にも変化が起こった。ファム・テー・ゲーが言うルソーやモンテスキューに関する論説とは、ファム・クインが彼の^{あざな}字である尚之 (Thượng Chí) のイニシャル T.c. などの名義で、フランスにおけるこれら啓蒙思想家に関する評論や著作の紹介などを行ったことを指している。しかし、ファム・クインはこれら啓蒙思想家がフランス革命に影響を与えたことなどについては好意的に評価してはいなかった。クインが翻訳したパリ大学文学部のクロースレ (Cloussé) の論説は以下のように述べている。

- ①『社会契約論』で主張されている平等で自由な政治路線や民主共和制は、実際には実現不可能であると当のルソーが述べている。
- ②ルソーの思想は骨格の無い空虚な思想であり、既存の体制を打倒すれば直ちに自由・平等・独立・幸福が実現すると思いでルソーに心酔することは危険である。

クインはわざわざこのような論説を選んで翻訳したのである⁵⁾。

一方、1920年代後半からクインはフランス植民地下での立憲論を唱えるようになった。最初に *France-Indochine* 誌にフランス語で掲載され、後に『南風雑誌』にベトナム語訳された「国学と政治」を見ると、真正なナショナリズムを確立するために、精神の改革（国学の確立）と政治の改革（フ

5) この翻訳「ルソーについての判断」は1928年に『南風雑誌』上に掲載されたものであるが、訳者については記名が無い。しかし、1926年以降、T.c. 名義でルソーに関するフランス語の論説の翻訳が掲載されているので、これもファム・クインによる翻訳と考えるのが妥当であろう。

ランスの保護下での憲法制定)が必要であるとの主張がなされている。また、グエン・ヴァン・ヴィンら、フランスによる直接統治論を唱える論者に対しては、直接統治されれば、フランス人を「主」、ベトナム人を「客」と考えて、フランス人を補佐するだけであり、ベトナム語を軽んじ、国文も国学も確立できなくなると反論した。さらに彼が立憲論を主張するのは、フランスという強国の陰に隠れてベトナムが監督権を得て国家としての自覚ができれば、誰にも干渉できないからという理由だった [Pham Quỳnh 1931b]。将来的なベトナムの独立を視野に入れているように見えるが、その時期を彼は50年後としており、それまでのベトナムの政体として国際連盟の委任統治領のような形を考えていたようだ [Pham Quỳnh 1930]。

このようなクインの主張は、1925年以來の民族主義の急進化に頭を悩ませていたフランス植民地当局者の目に留まった。パスキエがインドシナ総督に就任すると、1922年に父カイディン帝とともにフランスに渡り、1926年の即位に際してベトナムに戻った以外は依然としてフランスに滞在していたバオダイ帝は帰国して保守的な宮廷改革を始めた。ファム・クインは官房長官として宮廷に入った。その際、ゴー・ディン・ジエム (Ngô Đình Diệm) やグエン・デ (Nguyễn Đệ) らクインと同様に科挙に合格したことの無い者たちも任用された。しかし、この宮廷改革は、改革の急進化を恐れたパスキエと、それに追従したファム・クインのために挫折した。クインと対立したジエムは失望して1933年7月17日に内務大臣を辞任した。同日、クインは官房長官兼学部尚書から吏部尚書に昇進した [Brocheux and Hémerly 2009: 323-324]。

クインはなぜ改革に対し消極的になったのだろうか？ 翻心の理由の一端を垣間見ることができるインタビューが『南風雑誌』189号(1933年10月)に掲載されている。1933年8月26日付の *Impartial Sài-gòn* 紙に掲載され、同月の『南風雑誌』にも掲載された元はフランス語によるインタビューである。ここでクインは、改革には優先順番があると述べている。最も優先すべきことは、皇帝の内政権を回復し、すべての権限を朝廷が掌握することである。それが達成されてはじめて人民の代表が国権に参加することができると、クインは言うのである [Pham Quỳnh 1933: 310-311]。

こうしてバオダイの側近中の側近となったファム・クインは、1941年の日本軍による南部仏印進駐時には、アンナン理事長官グランジャン (Grandjean) と共に内政に関する権限を独占していた [Marr 1995: 113]。

II. 「仏印処理」からファム・クインの辞任まで

1. 「仏印処理」から「独立宣言」発布まで

1940年の北部仏印進駐、翌41年の南部仏印進駐を経て、日本軍はインドシナ全域に進駐したが、アジア・太平洋戦争開戦後に、白人国家による植民地支配が残ったのはインドシナだけであった。日本政府・軍中央の方針は「静謐保持」であり、フランス支配を容認してインドシナの政治的動揺を望まなかった。しかし、現地駐屯軍や外務省の一部、民間人の一部にはベトナムの独立を援助する運動があった。1944年中にフランスのヴィシー政権が崩壊し、アジア・太平洋地域で日本軍が度重なる敗戦を重ねると、日本は静謐保持政策を諦めた。1945年2月1日、最高戦争指導会議は、武力仏印処理の方針を決定した。その後の2月26日の最高戦争指導会議で、インドシナ総督府の機能は日本軍が継承し、ベトナム、カンボジア、ラオスの3王国についてはフランスからの「独立」を宣言させることが決定されたが、それはフランスによる統治形態とあまり差が無いと白石は述べ

る [白石 2012 : 217, 225-226 ; 白石 1984 : 40-51]。

1945年3月9日、日本軍によるフランス植民地機構の打倒、いわゆる「仏印処理」（軍事作戦名は「明号作戦」）が発動された翌日の3月10日午後4時30分、元外交官で当時ハノイの日本文化会館館長の職にあった横山正幸が日本側を代表してバオダイ帝に謁見し、ファム・クインだけがその場に同席した [横山 2017 (1946) : 46]⁶⁾。

横山はバオダイに対し、日本が軍事行動を起こした理由を説明した。それは、「従来、日本はインドシナにおける現状維持政策に忠実であり、植民地当局に協力してきた。しかし本国においてヴィシー政権が崩壊し、ド・ゴール將軍の政治的影響力によりインドシナにおける対日感情が悪化していることが強く感じられるようになり、また太平洋戦争の情勢は日本にとって好ましくなく、連合軍のインドシナ上陸が懸念されるようになった。さらに、最近、日本軍は、仏印軍指導者と多くのフランス人たちが日本に対する抵抗運動を組織していることを知った。こうした状況で、英米の侵攻に対してインドシナの安全を守り、防衛手段を強化するため、日本はインドシナ総督に対し武装解除を要求したが抵抗されたので戦闘行動を起こすことを余儀なくされた」というものだった [横山 2017 (1946) : 46-47]。

また、日本はインドシナに対し領土的野心を持っていないこと、大東亜共栄圏を確立するという唯一の目的のためだけに大東亜戦争を追求すること、この事業を助けるために今後協力することをバオダイとその政府に請う、とも述べた [横山 2017 (1946) : 46-47]。

バオダイは横山に満足の意を示し、ファム・クインに対して、この問題についてあらゆる可能性について横山とともに検討するよう命じた。クインは横山に以下のように問うた [横山 2017 (1946) : 47-48]。

ベトナムに対するフランスの保護国制度はもはや存続せず、必然的にベトナムは独立を取り戻すことになる。日本と効果的に協力できるようにするには、我が人民の支持を得なければならず、そのためには我が政府の威信が、独立という荘厳な行為によって強化されなければならない。私は、この問題について日本の意見がどのようなものであるか率直に知りたい。

クインの問いに対し横山は、「独立宣言は当該国の内政的観点から判断され行使されるべき主権行為であり、日本政府も日本軍も、この問題に介入せず、ベトナム政府の判断に従って、完全に自由に行動することができる」と述べる一方で、「起こり得る敵の侵攻に対して、この国の防衛を組織し容易にする目的のために、国内の政治的、行政的な現状維持がなされ、秩序と安寧ができるだけ早く回復されることを我が軍は望んでいる。すべての問題を一緒に検討するために何でも申しつけてほしい」とも指摘し、ベトナム側の行動が日本の制限を受けることを示した [横山 2017 (1946) : 48]。

クインは、生じつつある重大問題の検討のために御前会議を招集しその決定を伝えたいので、当日（3月10日）午後11時に内務省⁷⁾に来るように横山に求めた。横山が予定通りの時刻に渡邊領

6) 以下は、戦後にフランスの求めに応じて書かれた横山のメモワールによる。横山は1941年から仏印資源調査団長、後にハノイにあった日本文化会館の館長となり、「仏印処理」に際しては日本側の代表としてベトナム側と交渉にあたった [白石・難波 2017 : 1-10]。

7) 後述するクインの回想によれば吏部のことを指している。

事を伴って来訪すると、ファム・クイン以下すべての閣僚が待っていた。クインは横山に以下のように告げた〔横山 2017 (1946) : 48-49〕。

閣議は彼〔クイン〕の説明を聞いて充実した議論の後に、バオダイ皇帝陛下のご承認のもと、アンナン帝国が直ちに、そして全世界に独立を宣言すべしと決定した。ただし、政府はそれを大々的に知らしめる手段をまだ持っていないので、その役割を日本軍当局に要請せざるを得ない。

横山はクインから独立宣言のコピーを受け取ってすばやく目を通し、独立問題はベトナム側に属する問題なので日本側の反対意見は何ら見当たらないこと、宣言の公表にあたっては日本軍の責任のもとに必要なことを行うことを述べた〔横山 2017 (1946) : 49〕。

この独立宣言は翌 11 日に公開された。バオダイによれば、宣言の内容は以下の通りである〔Báo Đại 1990 : 162〕。

世界情勢一般とアジア固有の状況に鑑み、ベトナム政府は、本日より、フランス政府との間の保護協定は廃棄され、我が国は独立国家としての主権を回復したことを、ここに厳かに公けに宣言する。

ベトナムは一つの独立国家にふさわしい自力自強に努め、大東亜宣言の目指す道に従って共栄のために資源を援助しあう。

ゆえにベトナム政府は日本の誠意を信じ、上述の目的達成のために協力することを決意した。

1943 年の大東亜会議において採択された「大東亜宣言」に従い、「資源を援助し」あって日本との共存共栄を図るというが、日本の敗北が決定的になっていた当時の状況では、ベトナム側の「出超」となることは確実であり、現実には日本はコメや鉱物資源などをベトナムや他のインドシナ諸国から輸入していた。また、「大東亜宣言」自体が、連合国側の「大西洋憲章」に対抗して非西洋側から国際秩序を構想しようとした外務省と、当面の戦争遂行のためにアジアの人的・物的資源を動員する体制を築きたい軍部や大東亜省の要求を折衷させたものであった〔箕原・奈良岡 2016 : 286-287〕。さらに、本論文で見ると、日本はベトナムを「完全独立」させる意図は無く、バオダイもその臣下たちもそれを知っていたのである（後述）。

この一連の動きについてファム・クイン自身は、その遺稿とされる短い文章の中で、「仏印処理」の翌日（すなわち 3 月 10 日）の午後 4 時に宮中に参内し、随員である 2 名の領事と 2 台の車に分乗してやって来た横山を迎えたと書いている。謁見に際してはバオダイが中央に、その右側に横山が座り、両側に 2 人の日本領事とクインが控えた。クインは「この会見は、ベトナムの独立が提議されたがゆえに、ベトナムの歴史において極めて重要な一段階」であると述べている〔Phạm Quỳnh 2011 (1945): 42-43〕。

また、クインによれば、この後、午後 7 時から、機密院の特別会議（hội đồng đặc biệt Viện Cơ Mật）がバオダイの部屋で開かれ、午後 10 時に機密院メンバーが再び吏部に集まって横山を迎え、独立宣言を起草したという。彼は、「この謁見と会議は、ベトナム史上の重大事件であり、私は幸運にもそれに参画して一定の役割を果たすことができた」と振り返り、機会があれば詳述したいとしてこの短い文章を終えている〔Phạm Quỳnh 2011(1945): 42〕。しかし、数か月後に彼は処刑され

たために、それは実現しなかった。

一方、バオダイは回想記の中で、横山と初会見したのは「仏印処理」が起こった翌日の午前11時としているが、彼は「仏印処理」を3月10日と記憶違いをしているので、バオダイが横山に初めて会ったのは3月10日午前11時ということになる。彼はファム・クインが同席していたことには触れていない [Báo Đại 1990: 155-157]。

バオダイによれば、横山は「我々はこの地におけるフランスの主権尊重を約束したが、インドシナの各国、各民族との友好を模索している」「日本がインドシナを掌握せねばならなかったのは、レジスタンス側が武器を入手して我が軍の行動を妨害してきたからである」と説明した。バオダイは横山に「それは阮朝の主権を確認するとの宣言と解してよいか」と尋ね、横山は「それこそが我が天皇の意志であり、ゆえに自分はここに来た」と応じた [Báo Đại 1990: 157-158]。内容的にここまで横山の回想とほぼ一致する。

興味深いのは、バオダイの回想記には、横山やファム・クインの回想には無い、バオダイの日本に対する疑念から来る質問と、それに対する横山の回答が記されていることである。それは、フランス植民地体制の解体とベトナムへの「独立」付与にあたって、日本が自分に接触してくるのはなぜかというものである。

バオダイは横山に問う。「長年の間、貴国は、貴国に滞在しているクオンデ侯 (Cuồng Đế) を、我々ベトナム王朝の正統な代表者と見なしてきたのではないか？しかし本日、天皇陛下から命ぜられた使命を帯びて、閣下が我々の所に来られたことに驚いている」 [Báo Đại 1990: 158]。

クオンデはファン・ボイ・チャウが東遊運動（日本にベトナムの青年を留学させて近代的知識を学ばせ、これらの青年がベトナム独立運動を担い手とすることを目指した運動で1906-1907年に行われた）際に、チャウが運動の盟主として推戴した阮朝皇族で、運動崩壊後に日本を一旦退去したが1915年に再来日し、以後、日本で亡命生活を送っていた人物である。1930年代には、日本の参謀本部の援助の下でベトナムへのラジオ放送などのプロパガンダ工作を行い、1939年にはベトナム復国同盟会を結成していた。1940年の日本軍による北部仏印進駐の際には、同盟会の軍事部門である復国軍が日本軍とともに中国から国境を越えてインドシナに侵攻し、フランス軍と軍事衝突を引き起こした⁸⁾。そのリーダーであるクオンデではなく、日本はなぜ自分に独立を宣言させ、ベトナムの君主としようというのか、バオダイは訝ったのである。

横山は、日本は「アジアをアジア人に返還する」というアジアの諸民族すべての切実な願望であり、歴史上に定められた運命を何としても達成するつもりなので安心してほしいと述べるとともに、クオンデの役割に関しては以下のように述べ、バオダイにベトナム独立の宣言を促した。 [Báo Đại 1990: 159]。

この事業は長きに亘るものです。種を撒いた人が収穫する人とは限りません。クオンデ侯は、我々の反フランスという軍事目的の一つの道具でしたが、こんにちにおいては、陛下が、ふさわしい唯一の方なのだという結論に達したのです。（中略）私はベトナムの独立を陛下に上奏いたします。（中略）我が国政府は、陛下が独立を具体化する詔勅を発せられることを熱望いたします。

8) この日本軍とベトナム復国同盟軍による攻撃後、日本政府とフランス政府は交渉して日本軍は中越国境から中国側へ撤退し、取り残された復国同盟軍は取り残されてフランス軍の攻撃により壊滅した [白石 1982]。

日本政府と軍中央が、「仏印処理」実行にあたって、「独立」を付与したベトナムの君主に、「真正なナショナリスト」であるクオンデよりも、御しやすいバオダイを就ける意向であったことはすでに先行研究によって明らかにされている〔白石 1984, 立川 2000〕。横山は、それをバオダイに伝えたのであった。バオダイは、この日本の申し出に対し、以下のように考えて最終的にそれを受け入れる決断をしたと述べている〔Báo Đại 1990: 160-161〕。

- ①間もなく日本は戦争に負ける。その場合の同盟国の態度を考慮せねばならない。
- ②「アジア人のアジア」という伝統的スローガンは美しいが、ベトナムのような小国にとっての脅威は、遠くの西洋諸国よりも近隣の中国・インド・日本である。また、日本の軍事行動を見ると疑念を持たざるを得ない。
- ③日本がクオンデを排除し自分を選んだのは、自分がフランスと良好な関係を築いていることを知っているからであろう。日本は自らの意図が失敗した場合に、自分を使ってフランスと外交交渉しようとしているのだ。
- ④フランスの直轄植民地であるコーチシナの帰属について横山が沈黙しているのは、ベトナムに返還しなければならなくなるまで、日本ができるだけ支配下に置きたいからであろう。
- ⑤独立はすべてのベトナム人が望むものである。日本の過度な要求をできるだけ抑えて、時機を待とう。

コーチシナは、保護国であった中部（アンナン）、保護領であった北部（トンキン）と異なり、1862年のサイゴン条約によってフランスの直轄植民地となっており、フランスと日本との協定に入っていなかった。バオダイは日本の申し出を受け入れた理由を、ベトナム人の望む独立を達成するための時間稼ぎと回想している。日本の下では真の独立を達成することができないと考えていたというのである。

その日（バオダイによれば3月11日だが、実際には10日であろう）の午後、機密院の会議が開かれた。バオダイは横山の提案を伝え、6人の尚書全員が賛成して署名した。全員が署名するのは初めてのことだったという〔Báo Đại 1990: 161-162〕⁹⁾。

翌3月11日午前10時に機密院においてファム・クインは全尚書出席のもと再び横山を迎え入れ、バオダイの署名と印璽および全尚書の副署が入った独立宣言の公式文書を提出した。クインは、この荘厳な文書によってベトナムの歴史に新たな時代の第一歩を記すことをうれしく思うと述べ、この文書を周知させること、日本政府と日本軍への謝辞を伝えることを求めた。横山は直ちに公表の準備に入った〔横山 2017 (1946) : 49〕。

バオダイの回想記によれば、この時横山とバオダイの間で以下のような会話が交わされた。

横山：陛下、ベトナムは陛下のおかげで国家の独立を回復することができました。我が日本国は、謹んでお喜び申し上げます。日本国は常に正統な主権と、大南皇帝陛下がこの主権の正統な代表であらせられることを尊重いたします。

9) ただし、バオダイの官房長官であったファム・カク・ホエはベトナム独立を決定し、尚書全員が署名した御前会議が開かれたのは3月11日午前8時であるとする〔ファム・カク・ホエ 1995 (1987) : 21-24〕。しかし、他の回想録と符合しないので、記憶違いではないだろうか。

バオダイ:大使閣下、私はただ我が人民の権利のために行動したに過ぎません。すべての臣民、人民のため、私はどのような条件の下であっても、独立が実現することを望んだのです。また、私は大使閣下に何も隠しはしません。コーチシナも、トンキンやアンナンと同様に独立を享受する姿が見たいのです [Báo Đại 1990: 162-163]。

バオダイは、未だベトナムに返還されず、横山が言及を避けて来たコーチシナの帰属問題に敢えて触れたのである。横山は、答えた。

やむを得ず申し上げます。陛下、どうか耐えていただきますようお願いいたします。軍事情勢から、我々はコーチシナを戦略拠点と見なし、必要な措置を取らねばなりません。しかし、アジア人のアジアという戦略に勝利した暁には、必ずやコーチシナは独立ベトナムに返還されるでありましょう [Báo Đại 1990: 163]。

バオダイはそれ以上、何も言わなかった。そして、退出間際に横山はバオダイへの問いかけの形で自分の意見を述べたという。

ベトナムが新たな道を歩み始めたからには、国の革新に対応するために、新たな人材から成る政府を設立なさるおつもりは無いのでしょうか？ [Báo Đại 1990: 163]

バオダイはそれに対して微笑んだのみであった。「新たな人材に国家を運営する権限を与える」、それこそが即位以来の彼の目的の一つだったと彼は回想する [Báo Đại 1990: 163]。失敗に終わった1930年代の宮廷改革を思い起こしたのであろう。バオダイの回想に従えば、彼が人事の刷新を考え始めるにあたり、3月11日に謁見した際の横山の意見がきっかけだったことになる（横山がこのような意見を述べた経緯は横山の回想に詳しい。後述）。

それでは、ファム・クインとその内閣更迭を決意した理由を、バオダイ自身はどのように語っているか。

- ①機密院の動揺：ファム・クインの上奏によれば、機密院の中には、日本が態度を変えるのではないか、フランスが権力を取り戻すのではないかと心配する者がいた。一方では、アフリカに流刑になった元皇帝（維新帝）のヴィンサン（Vinh San）、或いはクオンデがベトナムに帰還するのではと心配する者もいた。このようなクインの「告げ口」に対し、バオダイは冷淡に応じた。「彼らが沈黙し、茫然自失の状態とはいかなることなのか？ 皇帝は朕であることを忘れてはならない。我々が諦めれば、ベトナムに朝廷はもはや存在しない」 [Báo Đại 1990: 164]。バオダイは、機密院の動揺、とりわけ「告げ口」をするようなファム・クインの指導力に懸念を抱いたのではないだろうか。
- ②フランスの壊滅：フェでは、日本軍の突然の攻撃で、小規模のフランス軍部隊は24時間の戦闘で壊滅して指揮官も戦死し、生き残った兵士も日本軍の捕虜となった。アンナン理事長官グランジャンも逮捕されてラオスに連行され、一般のフランス人は集められてフェ市内に軟禁された。「フランス政府はもはや存在せず、日本兵が公共機関すべてを占拠している。交通・連絡手段も無く、私は外部から孤立しており、真空状態の中にいる」とバオダイは嘆

いた。フエ以外の状況は不透明であり、また横山からはインドシナ総督ドクーとその参謀たちは、サイゴンで拘禁されていると告げられていた [Báo Đại 1990: 164]。バオダイはやはり、フランスを頼みの綱と考えていたのであろう。そのフランスの壊滅に、孤立感を深めていた。

- ③長年に亘る親日分子の存在：「彼らは国際情勢を顧みず、命がけて国家を奪回しようとして、日本のもたらした解放を歓呼する。ゆえに必要なことは、彼ら親日分子を導く人々を掌握することであり、代表的な人物は、当時サイゴンにいたゴー・ディン・ジエムだ」とバオダイは考えた。彼はジエムが日本軍と連絡していることを知っており、ジエムがフエに来れば、バオダイと日本当局者との関係が容易になるように助けてくれると期待したのである。バオダイは横山に対し、ジエムをフエに召喚するように求めた。横山はジエムの命令に従ってジエムを呼んだ。しかし、ジエムはフエを訪れず、バオダイはチャン・チョン・キムを首相に指名することになるのである [Báo Đại 1990: 163-164]。

2. 横山正幸の回想に見るベトナム有力者のファム・クインへの見解

上述のようにバオダイは、3月11日に独立宣言を横山に手渡した際、横山から人材の一新を求められ、これを考え始めたという。横山がこのような意見を述べるに至った背景が彼のメモワールに記されている。横山は限られた範囲ではあるがベトナム人の有力者たちと会見し、彼らの政局に対する態度や意見を聞いていた。彼は会見の日時を一切記述していないが、そこには、人々のファム・クインへの見解も述べられており、少なくとも3月19日のファム・クインの辞任前である。

a) ファム・クイン自身の見解

横山はクインについて、「状況に応じて活発に動いた。押し寄せるさまざまな出来事の中で、最良と判断した道を自らの意思で選んだ。高い見識と偉大な政治手腕を持つ人物であった」と評価し、彼の死を残念がっている。また、横山は、クインが辞任するまでの間に私的に交わした会話を通して、ベトナムの現状と将来に関する彼の考えを理解したと感じていた。クインは以下のことをよく語り、自分が真の愛国者であることを正当化していたという [横山 2017 (1946) : 50]。

自分はフランスの文化を深く理解しており、フランス人のすばらしい友人がいる。惜しむらくは、フランス政府の植民地政策が、アンナンの人々への願いや、彼らを劣った者としてでなく友人として扱うことによってフランスが得るであろう利益を全く理解しなかったことだ。民族主義者が、[クインが]あまりにフランスびいきであると判断し、フランスの植民地政策を利と見なしていることを知っている。それでも、自身の権限と能力の範囲内で—それが非常に限られたものであったにせよ—アンナンの人々に、よりよい運命を保証することに常に心を砕いてきた [横山 2017 (1946) : 50]。

また、クインは、ベトナムの将来が新世代の知識人の育成にかかっているとの見解を持っていた [横山 2017 (1946) : 51]。『南風雑誌』主筆としてクオックグーの普及やベトナム独自の国学の確立を主張し、宮廷に入ってから学部尚書を務めた経験もあるクインにとっては当然のことであつたらう。

b) フィン・トゥック・カンの見解

カンが横山に対して非常に率直に、「バオダイも、ファム・クインも全く人気が無い。人々は彼らをフランス人に忠実な奉仕者と見ている」「トンキンとコーチナ無くしてアンナンだけでは独

立国として生き残れず、北部、中部、南部を統一しなければならない」と述べた [横山 2017 (1946) : 51]。

c) ゴー・ディン・コイの見解

ゴー・ディン・コイ (Ngô Đình Khôi) はジエムの実兄である¹⁰⁾。彼はカンとほぼ同様に、「弟のジエムがこの状況にふさわしい人物であるが、彼はバオダイのもとで働くことも、ファム・クインに協力することも受け入れないだろう。ベトナム人政治家の大部分がこの感情を共有している」と述べた [横山 2017 (1946) : 51]。

これらの見解に対し横山は、「日本軍は何よりもまず、そのような変化を回避し、インドシナの現状維持を望んでいる。この国の防衛構築に懸命にとりかかっているのだから」と反論したが、逆に「現状はそのうち維持できなくなり、政府の交代が不可避となろう」と反駁されたという。彼は「私は後になって彼らの観察には十分に根拠があることを認めることになる」と述懐する [横山 2017 (1946) : 51-52]。横山は彼らの意見を聞いて、バオダイに人心一新を具申したのであろう。

横山は、フランス植民地政庁の最高責任者であるインドシナ総督の代わりにバオダイの最高顧問となり、ファム・クインの辞任まで、彼と協力して執務を行った [横山 2017 (1946) : 53]。

3. ファム・クインの辞任をめぐる経緯

ファム・カク・ホエは、独立宣言が起草された直後の3月12日に機密院の改組問題を提起しようと考えながら宮廷に向かった。どこから手をつけてよいか考えあぐねている時、ちょうどバオダイからの呼び出しがあり拝謁した。バオダイは、独立ベトナムを代表して日本人最高顧問やその他の日本人責任者たち全般と接触する人物たちに向けて、ファム・クインを選任するという内容の「論」を書くようにと命じた。ホエはこの命令に沈黙していたが、バオダイがクインと協力して困難を解決するように促すと、「ファム・クインは良くない人物です。人民各階層から憎まれ、知識人士層から軽蔑されています。彼の学識が広く、ベトナム語とフランス語の両方を上手に話せることは、みな知っているのですが。ですから、もしも陛下が民と国のことを真に思し召すのであれば、これ以上ファム・クインをお用いになるべきではありません」と答えた。半時間以上話し合ったが、バオダイはホエには同意せず、「取りあえずファム・クインを日本人との連絡役に当たらせ、その後で考えることにしよう」と結論した。ホエは、独立ベトナム政府と日本人責任者の間の連絡任務を暫定的にファム・クインに委ねるという「旨」(皇帝の発布する文章の各形式の中で、最もランクが下のもの)を起草し、バオダイの署名を得ると、それをすぐに六部や日本人最高顧問(すなわち横山正幸)に伝達した。ホエはこのような文書が、クインを立腹させることを覚悟した [ファム・カク・ホエ 1995 (1987) : 24]。

ところがクインは、3月14日にホエと式典で顔を合わせた際に、いつになく優しい態度でホエに接し、彼のオフィスに立ち寄るように誘った。同日の午後、ホエがクインを吏部に訪ねると、クインは、「祖国の明るい将来と欧亚二州の双方に通じる知識人の光栄ある前途」に関して、一時間以上に亘って話をしたという。ホエはクインの目論見が、自分を抱き込んで新たな主人である「ファシスト日本」に仕えるための緊密な協力者にすることだと思って、生返事で話をやり過ごし、何事も約束しなかった [ファム・カク・ホエ 1995 (1987) : 25]。

ファム・クインのもとを辞去してから、ホエは革命運動において多くの経験を持つ人々の意見を

10) 1945年8月23日にクイン、コイの息子フアン (Ngô Đình Huân) とともにベトミンに捕らえられ、処刑された。

聞く必要があると思ひ至り、同日夜、フエ在住のトン・クアン・フィエト（Tôn Quang Phiệt）を訪ねた¹¹⁾。ホエはフィエトに、ファム・クインを打倒して新政府に「良い人物たち」を充てるよう運動するつもりであることを話し、フィエトも賛意を示した〔ファム・カク・ホエ 1995（1987）：25〕。

さらに翌3月15日、ホエは、ブイ・バン・ドアン（Bùi Bằng Đoàn）とウン・ヒイ（Ung Hy）という機密院と官界において相対的に威信を得ている2人の尚書にも会い、ファム・クインの「邪で危険な本質」をバオダイにはっきりわからせることが必要だという点で同意を取りつけた。ホエはその日の午後、バオダイに以上の会見の内容を報告し、ファム・クインを引退させて新たな人材を招集する話を続けたところ、バオダイは関心を示しフィン・トゥック・カンを宮廷に呼ぶようにと言った。しかし、カンは「日本がバオダイに誠実であるはずが無い。バオダイに何ができるのか」と相手にしなかった〔ファム・カク・ホエ 1995（1987）：26〕。

3月16日朝、ホエはカンとの会見の様相をバオダイに伝え、真の独立と偽りの独立に関するカンの意見を敷衍して述べた。バオダイは熱心に聞き、クイン、カン、その他、ホエが推薦した人物について多くの質問をした。ホエは、バオダイの態度が変わりつつあるのを見て、バオダイに「民のため、国のためを真に思っていることを示す、何か具体的ことをすべきであり、かくしてはじめて人材を招集することができ、カンのような人物を説得できる」と述べた〔ファム・カク・ホエ 1995（1987）：26〕。

3月17日朝、バオダイに呼ばれたホエが彼の執務室に行くと、バオダイから文書を示された。その文書には、「今後は朕が自ら執権し、政治制度は『民為貴』という標語に基づくものとする」という意味のことが書かれており、バオダイはこの文書に沿った「論」を作成するように命じた。ホエはバオダイが自分でクオックグーの文章が書けたことを知って驚愕するとともに（ホエが初めて目撃したことだった）、バオダイに入れ知恵をしたのが誰か訝った（フランス語に堪能な横山が進歩的な意見を吹き込んだのではないかと疑った）。しかし、同時にホエは自分の運動が良い結果を導いたのだと思ひ、奮い立って「独立」ベトナムの「論」第1号を起草し、バオダイの署名を得た〔ファム・カク・ホエ 1995（1987）：27-28〕。

今度こそ、バオダイとの謁見に応じてくれると期待して「論」を持ってカンを訪ねるが、再びカンは拒否した。ただ、民心を得るためにバオダイが今年の税を免除するように命じることを助言してくれた。しかし、バオダイに伝えても、彼はこの助言に関心を示さなかったという。それは、「民為貴」の「論」が封建王朝の切実な権利に抵触した時の最初の試練であり、明白な敗北であったと、ホエは回想する。しかし、未だ意気揚々としていたホエは17日午後と夜、再びブイ・ヴァン・ドアンとウン・ヒイに会い、2人から新たな「論」についての歓迎の意と、6人の尚書全員の辞任について運動するとの約束を取りつけることができた〔ファム・カク・ホエ 1995（1987）：29〕。

だが、ホエは必ずしも敗北したとは言えなかった。「民為貴」を標語とした時点で、バオダイは機密院の改組とファム・クインの解任を決めていたと思われる。横山の回想では、3月16日午前、ファム・クイン自身から辞任の意向を伝えられていたのである。クインは以下のように述べた。

- ①バオダイは国務の全責任を取る決意を示し、自らが主催する強い政府を作ることを望んだ。
- ②ファム・クイン自身も大改革の必要性を感じており、クインとともに2人の尚書を残して、

11) フエ在住文化人、ベトミン活動家（後に歴史家）〔ファム・カク・ホエ 1995：8〕。

優れた人士から6人の尚書を新たに選出する内閣改造を計画していた。

- ③しかし、バオダイがすべての政治指揮権を手中に収める意思を伝えたので、厳粛な皇帝の權威を前に身を引くしかなくなった〔横山2017(1946):49〕。

翌3月17日、すなわちホエがバオダイから「民為貴」に基づいて「論」の作成を命じられたのと同じ日の午前中、横山はバオダイの執務室に招きいれられバオダイからもクインの更迭を知らされた。バオダイは、「社会秩序を維持し、不安を抱き落着かない世論を静め、公共的安寧を乱す諸党派の陰謀を予防するために、政府改革の緊急性についての考えを述べ、ファム・クイン内閣では状況に対処することができず、自ら国家の手綱を取ることを決意した」と語った〔横山2017(1946):56〕。こうして、3月19日午前10時ごろ、尚書6人全員がバオダイに謁見して辞任を願って、直ちに認められた〔ファム・カク・ホエ1995(1987):29〕。1930年代前半から宮廷で権力を維持してきたクインの政治生命が事実上終わったのである。

おわりに

ファム・クインは日本軍による「仏印処理」とベトナムに対する「独立」付与に際して、宮廷を代表して日本側との交渉役を勤め、一時期は「独立」ベトナムの行政の責任を担った。しかし短期間のうちに皇帝であるバオダイに罷免された。バオダイがファム・カク・ホエらの進言に従ったこと、バオダイ自身が制限された独立ではあるが日本の敗北までを視野に入れて親政に乗り出し、新たな政体の下で指導力を発揮しようと考えたことによる。クインも思いは同じであったろう。しかし、彼には人望がなかった。1933年以来、持論の立憲論を放棄した彼はあまりにフランス植民地政庁と結びつきすぎていた。常にフランス植民地支配の枠内で行動してきたことで、制限付きの独立と状況の下で彼が政権を担うことに対し、バオダイやフィン・トゥック・カンら民族主義者たちの支持を得られなかったのである。

日本の無条件降伏後、八月革命が起こり、彼は地方のベトミン勢力に捕らえられて処刑され、ベトナム民主共和国と社会主義共和国においては、長くその著作が人々の目に触れることもなかった。

しかし、ファム・クインをめぐる状況は変わりつつある。その背景には、社会主義の政治体制を維持しつつも、市場経済の競争原理を導入して経済発展を目指すドイモイ政策が行われたこと(1986年～)が背景にある。積極的な外資導入により外国との関係が緊密になり、また、市場経済の発展に伴いベトナム人の価値観が多様化した。

近年、ベトナムの歴史学会に、フランス植民地時代に対して「より進歩した生産様式をベトナムにもたらし、資本主義の発展と成長を刺激し促進する条件を作り出し、民族の文化の近代化の速度を速めたことを認めなければならない」(歴史学者ディン・スアン・ラムとグエン・ヴァン・カインの見解)という再評価の動きが生まれている〔古田2017:101〕。

21世紀に入って、ベトナム国内でファム・クインの再評価が始まった。ベトナムの代表的な史家ヴァン・タオは「ファム・クインは、人民に対して残虐な行為は行っておらず、愛国者を逮捕したり、流刑にするといった命令に署名することもなかった」「ベトナムの文壇、新聞紙上に東西文化を伝える上で功績があり、20世紀初頭のベトナム民族の言語と文化を豊富なものとするのに貢献した」と述べた〔古田2017:114〕。2018年3月には、民間の「ファン・チュー・チン財団」(本

論で何度も言及したあのファン・チュー・チンの名を冠している)により、「大文化人、ゆるぎない愛国者」として表彰された。『南風雑誌』などの活動を通じて、クオックグーの普及と整備に努めたこと、儒教文化を尊重したことなどが理由とされている [宮沢 2020: 149]。ファム・クインに対する評価の変化には、植民地支配からの民族主義運動と革命運動の時代を経て、経済発展による国家建設・国民統合を図り、今や中進国となったベトナムの歩んできた道が象徴的に示されている。

謝辞

貴重な文献をご提供いただきました廖欽彬先生、グエン・ナム先生にお礼申し上げます。

本稿は、科学研究費補助金基盤研究 (B)「逐次刊行物データを利用したインドシナ 3 国出版思潮の研究」(研究代表者・大野美紀子先生)の成果の一部です。感謝申し上げます。

参考文献

〈日本語〉

- 川口健一 1999 「キム・ヴァン・キエウ」, 石井米雄監修, 『ベトナムの事典』, 同朋舎, 310.
- 白石昌也 1982 「ベトナム復国同盟会と 1940 年復国軍蜂起について」『アジア経済』, 第 23 巻 4 号, 22-44.
- 1984 「チャン・チョン・キム内閣成立 (一九四五年四月) の背景——日本当局の対ベトナム統治構想を中心として——」土屋健治・白石隆編『東南アジアの政治と文化』東京大学出版会, 33-69.
- 2012 『日本をめざしたベトナムの英雄と皇子——ファン・ボイ・チャウとクオンデ』彩流社
- 白石昌也・難波ちづる 2017 「訳者解説」白石昌也・難波ちづる・岡田友和・白井拓郎訳『外交官・横山正幸のメモワール—バオ・ダイ朝廷政府の最高顧問が見た 1945 年のベトナム』早稲田大学アジア太平洋研究センター 1-10.
- 立川京一 2000 『第二次世界大戦とフランス領インドシナ——「日仏協力の研究」——』彩流社
- ファム・カク・ホエ 白石昌也訳 1995 [1987] 『ベトナムのラスト・エンペラー』平凡社
- 古田元夫 2017 『ベトナムの基礎知識』めこん
- 箕原俊洋・奈良岡聰智編著 2016 『ハンドブック近代日本外交史』ミネルヴァ書房
- 宮沢千尋 2012 「戦間期の植民地ベトナムにおける言語ナショナリズム序論—ファム・クインらの「キム・ヴァン・キエウ論争について」, 加藤隆浩編『ことばと国家のインターフェイス』(南山大学地域研究センター共同研究シリーズ 6), 行路社, 75-100.
- 2020 「植民地期ベトナム知識人にとっての「文明」と「国学」—ファム・クインと『南風雑誌』を中心に」, 大澤広晃・高岡祐介編『近現代世界における文明化の作用「交域」の視座から考える』, 行路社, 133-154.
- 横山正幸 2017 [1946] 白石昌也・難波ちづる・岡田友和・白井拓郎訳『外交官・横山正幸のメモワール—バオ・ダイ朝廷政府の最高顧問が見た 1945 年のベトナム』早稲田大学アジア太平洋研究センター

〈ベトナム語・欧文〉

- Bảo Đại 1990 *Con Rồng Việt Nam*. Los Alamitos: Nguyễn Phương Tộc Xuất Bản.
- Brocheux, Pierre and Daniel Hémerly 2009 *Indochina. An Ambiguous Colonization 1858-1954*. Berkley Los Angeles London: University of California Press.
- Goscha, Christopher E. 2004 “The Modern Barbarian”: Nguyen Van Vinh and the Complexity of Colonial Modernity in Vietnam”, *European Journal of East Asian Studies*, Vol. 3, No. 1, 135-169.

Marr, David 1995 *Vietnam 1945. The Quest for Power*. Berkley Los Angeles London: University of California Press.

Phạm Quỳnh 2011 [1945] “Chuyện Một Đêm Một Ngày”, *Hoa Đường Tùy Bút và 51 bản dịch thơ Đỗ Phủ*. Nhà Xuất Bản Hội Nhà Văn.

Phạm Thế Ngũ 1965 *Việt Nam Văn Học Sử Giản Ước Tân Biên- Văn Học Hiện Đại 1862-1945*. Saigon : Quốc Học Tùng Thư.

〈Phạm Quỳnh の論説〉

“Mấy Nhời Nói Đầu”. NP1, 1-7, 1917. 「巻頭言」

“Truyện Kiều”. NP30, 480-500, 1919. 「キエウ伝」

“Bản Phiếm về Văn Hóa Đông Tây”. NP84, 447-453, 1924. 「東西の文化を汎く論ずる」

“Chủ Nghĩa Quốc Gia”. NP100, 401-405, 1925. 「ナショナルイズム」

“Nước Nam Năm Mươi Năm Thế Nào?”. NP154, 215-219, 1930. 「ベトナムは 50 年後にどうなっているか？」

“Bản về Quốc Học”. NP163, 515-522, 1931a. 「国学について論ず」

“Quốc Học với Quốc Văn”. NP164, 1-7, 1931b. 「国学と国文」

“Quốc Học với Chính Trị”. NP165, 107-111, 1931c. 「国学と政治」

“Chính Trị ở Huế”. NP189, 304-311, 1933. 「フエにおける政治」

〈T.-c. 名義または無記名の翻訳〉

“Lịch Sử và Học Thuyết của Rousseau (Lư Thoa)”. NP 104, 1926, 207-225, 1926. T.-c. 「ルソーの履歴と学説」

“Phán Đoán về Rousseau”. NP 108, 138-142, 1928. L. Crouslé 著. 訳者無記名。 「ルソーについての判断」